

今、あまた数多の写真家がそれぞれ関心のある対象物を撮影し、さまざま媒体で発表している。水にかかわる自然だけでも、山や森、川、湖沼、海、雪、雲などが思い浮かぶ。なかでも、「波」を撮りつづけている僧侶が佐渡にいと聞いた。なぜ「波」なのか。強い興味を抱き、新潟港からフェリーに乗った。

一つとして同じものはない

「波」を撮りつづけて





佐渡に移り住んだ 僧侶・写真家

佐渡の玄関口、両津港から約30km北上し、最北端の鷺崎集落へ向かう。鷺崎の冬の寒さは、佐渡のなかでもひとときわ厳しい。「寶鷺山観音寺」を訪ねると、袈裟を着た梶井照陰しょういんさんが、愛犬のハナとともに迎えてくれた。梶井さんはお寺の僧侶であり、また写真家でもある。3日前に釣り上げたという大きなカツオを見せてくれた。「何十尾も釣れたので、近所の人にもお配りしました。これは切り身にして焼くか、カツオ大根にして食べようと思います」

そう話す梶井さんは、祖父から受け継いだ畑で野菜を育て、集落の人から借りた田んぼで米をつくり、目の前の海に船を出して漁もする半農半漁の暮らしを続ける。

福島県郡山市で生まれ、幼少期から新潟市内で育ち、ゴールデンウィークやお盆、お正月になると、祖父母の寺のある佐渡に両親と訪れ、お寺を手伝っていた。両親は新潟市内での仕事があったため、梶井さんが大学を卒業後、祖父母の寺を継ついでごうと2000年（平成12）に佐渡へ移り住んだ。佐渡で



梶井照陰「NAMI」 2004年



最近増えている「孫ターン」(注)の先駆けということになる。

写真は、小学生のころ熱中していた昆虫採集が原点。昆虫観察が好きだった梶井さんは、蝶々などを捕まえては標本にしていたが、標本にするには生きているうちに殺さなければいけない。それに耐えられず、中学生のころから写真を撮るようになった。それ以来写真は独学で撮りつづけている。

何時間もかけてとらえる一瞬の波

佐渡の海や波を撮るようになった理由をこう語る。

「佐渡に渡るフェリーは、海が荒れるとかつては6mもの高さの波のなかを進むことも珍しくありませんでした。船のなかで波に揺られていると、自分と波が一体になったような感覚になります。俯瞰した海の写真はよくありますが、そうではなく、もっと低い視点から、主観的に波を撮りたいと思うようになりました。子どものころから佐渡の波を見て、体で感じた結果かもしれません」

佐渡に移り住んでから4年間撮りつづけた波の写真は、『NAMI』という写真集として2004

(注)孫ターン

祖父母が住む地方(いなか)への移住を指す。「Uターン」や「Iターン」を転用した言葉。

年（平成16）にリトルモアから発売された。1位になれば写真集を出版できるという雑誌主催のフォトコンテストで、梶井さんの作品がグランプリに選ばれたためだ。

梶井さんがとらえた波の写真は、ダイナミックでもあり、繊細でもある。特に、低い位置から撮影した写真は、波がまるで生きもののように迫ってくる。

「波を撮るとき海には入りません。波がくるギリギリの位置で這いつくばって待つて撮ります。ただし100回か1000回に一度は大きな波がくるので、注意してないと波に攫さらわれそうになります」
いい波を撮るために、同じ場所で6〜7時間カメラを構えて待ちつづけることも少なくない。ただし、いい波が撮れなくても一喜一憂することはない。

「撮影は漁とも似ていて、何も獲れない日もあれば大漁の日もあります。今日は今日でいいのです」と大らかだ。

視点は海から廻り 限界集落も撮影

波を撮りながら、関心は川へも向けられた。

「その昔、鷺崎集落は原野でした。



1



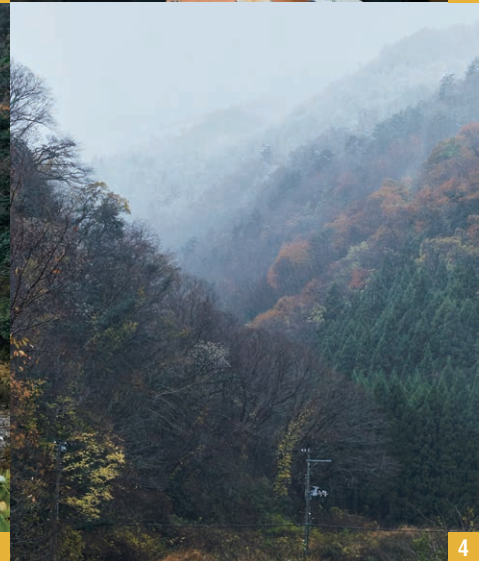
3



2



5



4

1 高台から見た鷺崎集落の港 2 愛犬のハナと梶井照陰さん。ハナは船に乗って漁にも出る 3 梶井さんが住職を務める「寶鷺山 観音寺」 4 海岸から見た佐波の山。海沿いは雨でも山は雪。標高差がよくわかる 5 両津から鷺崎集落へ向かう海沿いはこうした断崖絶壁が続く

先人が川の水を引いて田をつくり、畑を開きました。その川の水は栄養分を海に届け、魚や海藻を育てます。海の次に、生きものにとつて大事な役割を担う川を見てみると思うようになりました」

川の撮影は、南米のイグアスの滝を皮切りに、オーストラリアや

カナダ、モロッコ、ジンバブエ、中国など世界各国に及び、国内でも撮影を行なった。この一連の写真も2010年（平成22）に『KA WA』という写真集となった。

海と川のほかに、2007年（平成19）から定期的に撮影している対象に、限界集落がある。最近

は地元・鷺崎の若い人や戦争を体験したお年寄り取材して撮影し、佐波の芸術祭などで発表している。意外なことに、鷺崎が限界集落であることをあまり悲観的にとらえていない。

「鷺崎が本格的に開拓される前は7軒しかなかったそうです。また



梶井照陰「KAWA」 2010年

昔に、元の姿に戻りつつあると考
えればそう悪くない気もします。
米も野菜もとれるし、海の恵みも
あつて自給自足できますから」

〈色即是空〉のような 水という存在

波や川を撮りつづけて気づいた
ことは何かを尋ねた。

「特に海は、わずかな雲行きで数
分前とは様子がガラリと変わるの
で怖さを感じることもあります。
東日本大震災で親戚の家が流され、
震災直後に物資を抱えて海の様子
を撮影しながら、岩手県の宮古や
陸前高田を回りました。佐渡で波
を撮っていたときは、海は恵みを
与えてくれる存在だと感じていた
のに、一瞬で悪魔のような存在に
もなり得ると改めて知り、それ以
来少し見方が変わりました。また、
海も川も表面だけではわからない
見え方があることを感じ、最近
は水中も撮影しています」

そう話す梶井さんは、「水は塊で
もあるがつかめない、とらえどこ
ろのない存在」だと言う。そこに
惹かれる部分もあるそうだ。

「毎日太陽の動きを見ながら撮影
していますが、太陽の昇る位置や
光の当たり方で刻々と変わる海や

川の表情は見えて飽きません。
波や流れは一つとして同じもの
はないのです。その一方で危険も
らんでいる。よく知っている目の
前の海で命を落とす地元漁師や
住民がいます。仏教の根本的な教
えの一つに〈色即是空〉という言
葉があるのですが、水の存在はこ
れにも近いと感じます」

色即是空とは「般若心経」にあ
る言葉で、目に見えるもの、形づ
くられたものは刻々と変化して
おり、不変な実体は存在しないと
いう意味だ。この話を聞いたあとに
梶井さんの写真を見直すと、一瞬
で変わる自然界の姿や変化を受け
入れ、それをとらえようとしてい
るように見えた。

(2022年12月1〜2日取材)



梶井照陰さん

写真家 僧侶

Syoin Kajii

1976年福島県生まれ。佐渡島の最北端・鷲崎で僧侶をしながら写真家として活動。日本海の波を被りながら撮った写真は作品集「NAMI」となる。波の写真撮影を継続するほか、限界集落の写真を各地で撮り、アジアに足繁く通い大乗仏教の名残も撮影。

ART

【撮る】